

ジェンダーレンズ、 ダイバーシティという視点

特定非営利活動法人あおもりダイバーシティ
理事長 白井 壽美枝



女子マラソンに女子サッカー、今は大人気の女子スポーツが、ほんの何十年前まで「女子には向かない」、それどころか「かわいそう」とまで言われていたのはNHK大河ドラマ「いだてん」でも少し触れられた一節。「男子厨房に入らず」「男たるものむやみに笑うな」、これらが守られていたのもそう遠い昔ではありません。「このようにあれ」といつしか正当になり、「そうしなければ」と多くの人が自分にも周囲にも求めた。前述の件なら、多くの人は今では「そんなことない」「なんて不自由だったのだろう」と思うでしょうが、実は今でも後日「なんでそんなことに縛られていたの」と思うだろうことが多々あります。「変える」のはきっと難しいことなのです。

それでも、「犬も食わない夫婦げんか」「うまくやらずにちゃ」とスルーされてきた夫婦間・恋人間の暴力がDV（ドメスティック・バイオレンス）、「社内の潤滑油」「若いからだよ」とかわされてきたことがセクハラ（セクシュアル・ハラスメント）という名を持ち、認識されるようになりました。パタハラ（パタニティ・ハラスメント：男性の育児をする権利や機会を職場の上司や同僚などが侵害する言動）に苦しめられる男性たちがまだまだ多い現実ではありますが、育児休暇をしっかりと取る男性も増えてきました。

一方、「女性活躍」という言葉が脚光を浴びて5年にはなります。それでも、政治分野を中心に女性の活躍が遅々として進まない日本。「議員や首長に立候補するには離婚覚悟」という話を今でも聞きますし、「女子に不利

な医学部受験」はつい最近のことでした。変えることは何なのかに目を向けるよりも、「今までの理解の範囲内」で対処しようとする姿勢はなかなか変わりません。

最近、欧米で注目され始めているのが「ジェンダーレンズ投資」です。投資先の審査に、投資先経営層のジェンダーバランスを重視するというもの。世界の購買力の7割以上を女性が占める。そこで、女性視点のニーズが役に立つ。これは、実はずっと以前から気づかれていたはずですが、多様（ダイバーシティ）な分野の人脈が起業にも存続にも必要とも気づいていたはずなのに、女性が活躍していない。男性中心の意思決定で投資機会を見逃していませんか？——この考え方はそう提案しています。投資に限らず、「ジェンダーレンズ」「ダイバーシティ」は社会を変えるキーワードでしょう。

「足を踏んでいるほうは気づかない。踏まれている人が『踏んでいます。痛いです』と声を上げられる社会に」と落合恵子さんが言ったのは20年以上も前です。踏まれ続けている足は、そこここにあります。声を出せる社会にしていくことも私たちがしなければならぬことではないでしょうか。

令和元年度男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰を受けました。平成27年度には青森県いきいき男女共同参画社会づくり功労者表彰、28年度には青森市表彰、30年度には青森市男女共同参画推進表彰個人の部をいただきました。感謝を胸に、今しばらく、活動を続けて参りたく思っております。